米語にみられるアメリカ=インディアン語について

川　口　博　久

I　「新しい事物，特質，事業，概念，知識に関して語る必要があるとき，これが借入語をするひとつの大きな動機である」と Mackwardt は彼の著書 *American English* で述べている[1]。これはどの言語にも言えることであるが，アメリカ英語形成過程においてはまさにこの通りであったと言えよう。

1607年，英国人はバージニア州ジェイムズ=タウン（James Town）に植民地建設を行ったのを最初に，プリマス（Plymouth）の建設（1620年），マサチューセッツ（Massachusetts）湾植民地の建設（1628年），メリーランド（Maryland）植民（1630年）と次々東海岸を征服していった。このようにイギリスの勢力拡大と共に，当時の英国英語がアメリカにもたらされ，広く使用されることとなるのは当然のことであろう。ところが，新天地アメリカにおいて英語は全く独自の道を歩むこととなる。イギリスがアメリカに植民を始めた頃，原住民のアメリカ=インディアン[2]，他の地域からアメリカ進出を意図していたフランス，スペインなど，他のヨーロッパからの人々が生活をはじめていた。イギリス人達は，新大陸においての新しい事物に対する語を，その人々の言語から借り入れることをした。本稿ではその借用語のうち，アメリカ=インディアンからの語を取りあげ，それが現代アメリカ英語に，いかなる特徴を持ちながら生き残っているか考察してみたい。

II アメリカ＝インディアンは，今から2万5千年程前ベーリング海峡 (Bering Strait) がまだ陸地であった頃，アジア大陸より渡来し南下して来たとするのが通説である。1492年，コロンブス (Christopher Columbus) が西インド諸島を発見した頃約80万人，1600年から1845年にかけては約115万人のアメリカ＝インディアンが北アメリカ大陸に住んでいたと推定されている。彼らは約500部族に分かれ，種族により独特の言語，文化を持っていた。

図1 合衆国のインディアン大語族

彼らの言語には数種の言語が広範囲に分布を示すという傾向はなく，多種多様な言語が発達し，それらが狭い地域の小集団に限定され使用されていた。その数は200種以上にのぼったとされている。1891年，パウエル (John Wesley Powell) はこのように細分化されていた言語を，58の語群にはじめて系統だてた。さらに1929年サピア (Edward Sapiar) はそれらを6つの大語群 (1)エスキモー＝アレウト大語族 (Eskimo-Aleut)，(2)アルゴンキン＝ワカッシュ大語族 (Algonquian-Wakashan)，(3)ナデネ大語族 (Nadene)，(4)アズテク＝タノア大語族 (Aztec-Tanoan)，(5)ペヌート大語族 (Penutian)，(6)ホケン＝スー大語族 (Hokan-Siouan) に再編成し直した (図1参照)。

エスキモー＝アレウト大語族は，現在のカナダ以北の北極，亜北極地帯

で話されていた言語をさす。アルゴンキン＝ワカッシュ大語族には5大湖から東海岸地帯にかけてのアルゴンキン語族，北西海岸のワカッシュ語族が含まれている。アルゴンキン語族は，5大湖国境沿いのオジブワ (Ojibwa)，チプワ (Chippewa) 等の各種族，ロード＝アイランド (Rhode Island) に住んでいたナラガンセット族 (Narragansett)，セント＝ローレンス川 (St. Lawrence) 下流域のアブナキ族 (Abnaki) の言語から成っている。ワカッシュ語族に属する原住民は主として，バンクーバ島 (Vancouver Island) を中心に住んでいた。ナデネ大語族は，北西海岸地帯，カリフォルニア，南西部，さらに大平原の南部で用いられた各種の言語をいう。アリゾナ州に現在もなお住むナヴァホ族 (Navaho)，ヨーロッパからの馬の導入以来定住せず草原を駆けめぐったアパッチ族 (Apache) などの言語がこれに属する。アズテク＝タノア大語族は主にロッキー山脈以西のカリフォルニア州，アリゾナ州，ワイオミング州 (Wyoming)，ネバダ州，ユタ州 (Utah) で使用されていた言語の総称である。アリゾナ州のホピ族 (Hopi)，大平原のコマンチ族 (Comanche)，西部のショショーニ (Shoshone) の言語が代表的なものである。オレゴン州，アイダホ州 (Idaho)，ワシントン州のような北太平洋岸諸州で使用された言語はペヌート大語族に分類される。オレゴン州を中心とするチヌーク族 (Chinook) の言語が特にアメリカ英語と関係が深い。ホケン＝スー大語族はカリフォルニア州，平原地帯，南東部，東部の各地域にわたっている。とりわけミシシッピー川西岸のスー語族 (Siouan)，南部地方のマスコギアン族 (Muskogean)，東部森林地帯のイロコイ語族 (Iroquoian) が代表的な語族とされよう。

生活文化面でも，狩猟生活を行う部族，トウモロコシなどの農耕生活を行う部族，狩猟生活，農耕生活両方を営む部族等々一様でなかったとされている。現在では，アメリカ＝インディアンの文化圏を，(1)東部森林文化圏，(2)南東部文化圏，(3)平原文化圏，(4)高原文化圏，(5)南西部文化圏，(6)北西海岸文化圏，(7)カリフォルニア文化圏の7つに分けている（図2参照)。

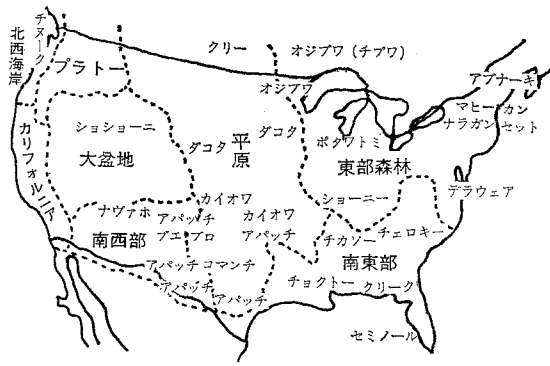

図2 合衆国のインディアン文化圏と部族居住地

（1）東部森林文化圏はミシシッピー川から大西洋岸に至る森林地帯をさす。原住民は，トウモロコシや豆類を栽培したり，猟をしたり半農半猟の生活をしていた。この文化圏に属する種族はほとんどがアルゴンキン語族に属していた。（2）南東部文化圏はミシシッピ川下流から大西洋岸に至る地域をさす。マスコーギアン系の諸部族がトウモロコシ栽培を主とする定住農業を営んでいた。（3）平原文化圏はロッキー山脈東麓からミシシッピー川に至る草原地方を意味する。ミシシッピー川に沿って定住農業をしていたオマハ族 (Omaha)，カンサス族 (Kansas) などの諸部族，コマンチ族 (Comanche) やアパッチ族のようなバッファローを追う狩猟民族がこの文化圏には住んでいた。ここで話された言語は30あまりあり，アルゴンキン＝ワカッシュ，ナデネ，ホケン＝スー，アズテク＝タノアの大語族のいずれかに属するものがほとんどである。（4）高原文化圏はプラトー文化圏と大盆地文化圏とに分けて考えられることもある。この文化圏では，農耕栽培など一切なく，鹿狩りや，野生の実の採集による原始的生活が営まれていた。特に大盆地文化圏では野生の実を，プラトー文化圏では植物の根を食べた。ショショーニ族などがこの文化圏に住んでいた。（5）南西文化圏は農耕の文化圏ともいわれる。メキシコの北に続く乾燥地方を言う。9世紀には潅漑用水路をめぐらした種族もあり，トウモロコシ，豆，カボチャ

の類を栽培する定住農業を行っていた。ホケン＝スー，アズテク＝タノア，ナデネのいずれかの大語族に属する種族が生活していた。(6)北西海岸文化圏はオレゴン州のコロンビア川からアラスカ南部にかけての地域を意味している。この文化圏のインディアンは農耕をせず，木いちごのような植物性のものを採集したり，海や川でサケ，ニシン，オヒョウ，クジラなどを主とした100%狩猟の生活をしていた。ナデネ大語族，アルゴンキン＝ワカッシュ大語族，ペヌート大語族のいずれかに属する数十の言語があった。コロンビア川沿いに住んでいたチヌーク族はこの文化圏に分類されよう。(7)カリフォルニア文化圏はロッキー山脈西側から太平洋岸にかけての地域を含んでいる。他の部族とほとんど接触を持たず，孤立して狩猟と採集だけを行う部族が住んでいた。ドングリをよく利用したことからドングリ地域とも言われている。

III まずどのような種類のアメリカ＝インディアン語がアメリカ英語に取り入れられているのかみてみたい。その手段として，Mathews の *A Dictionary of Americanism*[3] にどのようなアメリカ＝インディアン語が採録されているか調査した。ただし，インディアンの部族名，部族名のついた名詞(例：chinook canoe), "Indian" のついた名詞（例：Indian creeper）などはこの調査から除外した。その結果164語の借用語が見出された。筆者の不注意の故，見落した語もあるかもしれないが，約200語弱の語が新大陸にて英語に取り入れられたことになる。しかしこの164語の中には，昔は使用されたが現在では全く使用されなくなった語もあるので，ここでは現在でも使用されている可能性があると考えられる88語について[4]，次のように項目別に分類してみた。

（1） 植物 camass（ヒナユリ），catawba（カトーバぶどう），cohosh（コホッシュ），coontie（フロリダアザミ），cushaw（ヘチマカボチャ），pecan（クルミの一種），persimmon（柿），poke（山ゴボウ），pucoon（ムラサキ科の一植物名），squash（カボチャ），tuckakoe（マツホド），wapatoo

(オモダカの一種), chinquapin (クリの一種), chittamwood (ハグマの木), hickory (ヒッコリー), mahála mát (クロウメモドキ科の一種), salal (ツツジ科の一種), saskatoon (ザイフリボク), tamarack (アメリカから松), tupelo (ヌマミズキ属 Nyssa の木の総称), wahoo (米国産の数種の木または低木の総称), wicopy (カワノキ), yaupon (モチノキ属の木)。

(2) 動物 caribou (カリブー), carcajou (クズリ), cayuse (アメリカインディアンの使う小形の馬), chipmunk (しまりす), dowitcher (オオハシシギ), massasauga (ガラガラヘビの一種), moose (カナダ及び北米産の大鹿), musquash (じゃ香ねずみ), opossum (北米産のふくろうねずみ), pekan (フィッシャー=テン), quickhatch (くずり), raccoon (あらいぐま), skunk (しまスカンク), wapiti (ワピチ), wejack (フィッシャー=テン), woodchuck (モルモット)。

(3) 魚類 eulachon (ニシン目キュウリナ科の食用の小魚), cui-ui (サッカー科のくちびるが薄い淡水食用魚), menhaden (大にしん), mummichog (メダカ科の小魚), muskellunge (かわます属の釣魚), namycush (イワナの一種), quahog (食用具の一種), sauger (淡水魚の一種), sockeye (紅ざけ), squeteague (ニベ科食用海水魚), tautog (ベラ科の食用魚), togue (イワナの一種)。

(4) 人物 cheechaho (新参者), klootch (インディアンの女), mugwump (有力者, 自党の政策などに批判的である政治家), papoose (アメリカ=インディアンの赤ん坊), sachem (アメリカ=インディアンの酋長, 政党の指導者), sagamore (族長), sannup (既婚のアメリカ=インディアンの男), squaw (アメリカ=インディアンの女, 妻), tyee (酋長)。

(5) 道具 paho (ホピ族の祈禱用の杖), pogamoggan (狩に使用するトナカイの角で作ったこん棒), quoddy (竜骨帆船), toboggan (そりの一種), tomahawk (まさかり), atlatl (矢投げ具)。

(6) 生活用品 matchcoat (インディアンのマント), parka (毛皮製上着), shaganappi (皮ひも), wampum (貝殻玉), wanigam (材木切出し飯

場の補給品箱)。

(7) 食物 pemmican (保存食料), pone (トウモロコシパン), rubbaboo (ペミカン), succotash (トウモロコシと豆から作った食物)。

(8) 自然 (現象) pogonip (霧氷), pokelogan (川, 湖から分岐して沼のようによどんだ水), pocosen (海岸沿いの高原にある沼地), bayou (支流, 入江)。

(9) 建造物 kiva (プエブロインディアンの宗教儀礼用の地下ないし半地下), tepee (アメリカ=インディアンの円錐形の天幕), hogan (ナバホインディアンの土でおおった住居), wigwam (アメリカ=インディアンのテント小屋)。

(10) 風俗 powwow (病気平癒, 狩猟の成功などを祈るために行う儀式), potlatch (北米北西海岸のインディアンの間で自分の富を誇示し高めるため, 多くの財産を消費し大盤ぶるまいをし, 参加者全員に豪勢なみやげ贈物を与えること)。

(11) その他 manito (超自然力を持つ霊), how (やあ, さあ), skookum (大きな, 上等の, 強力な)。

調査総語数88語に対する項目別単語数の割合は次のようになる。

(1)植物	26.1%	(2)動物	18.2%	(3)魚類	13.6%
(4)人物	10.2%	(5)道具	6.8%	(6)生活用品	5.7%
(7)食物	4.5%	(8)自然(現象)	4.5%	(9)建造物	4.5%
(10)風俗	2.3%	(11)その他	3.4%		

植物に関する借入れ語が26.1%と他を大きく離していることが目につく。又, 植物, 動物, 魚類を動植物として分類したとするならば, 実に58%の高率になる。借入れ語が起きる場合の基本的要素については冒頭ですでに述べたが, 新大陸アメリカに渡った人々がそれまで目にしたことのない多数の動植物に出合い, そしてそのための新語の多くをアメリカ=インディアンからの借用語にたよっていたことが想像できる。「人物」の項の割合も10.2%と1割をこえているが, 借入れ語から判断すると, これはイン

ディアンという人種を自分達白人と区別しようとしたせいではなかろうか。その他「生活用品」,「食物」など，どの項を見ても，そのほとんどはアメリカ＝インディアン特有の物をあらわす語であることがわかる。

上記88語はどの大語族に属するか，その割合を示しているのが次の数字である。

アルゴンキン＝ワカッシュ大語族	63.7%
ホケン＝スー大語族	12.5%
ペヌート大語族	11.4%
アズテク＝タノア大語族	3.4%
ナデネ大語族	1.1%
エスキモー＝アレウト大語族	1.1%
出所が判明しないもの	6.8%

全体の借入れ語の6割強がアルゴンキン＝ワカッシュ大語族に属し，その割合は他の大語族よりもはるかに多いことがわかる。この大語族中，バンクーバ島を中心とするワカッシュ語族からの借入れ語は調査語の中には全く見られず，すべてアルゴンキン語族からのものであった。これは，合衆国植民の歴史が東海岸を起点とし西進したこと，アルゴンキン語族に属する部族が合衆国東部に住んでいたということを考えれば当然のことであろう。ホケン＝スー大語族からの借入れ語が次に多い。この大語族においても，合衆国西部のカリフォルニア州北部とアリゾナ州の一部で使用されていたホケン語族からの借入れ語はみあたらなかった。チョクトー (Choctaw) 族，スー (Sioux) 族，クリーク (Creek) 族などの属するスー語族からの借入れ語が大半を占めていた。ペヌート大語族も11.4%と，アズテク＝タノア，ナデネ，エスキモー＝アレウトの各大語族と比較すると高率を示している。このペヌート大語族の中では，オレゴン州コロンビア川沿岸に住んでいたチヌーク族からの借入れ語が多い。西部にあるにもかかわらずこの地域からの借入れ語が多い理由として，この地域は他の西部地域よりも比較的はやく開拓されたことが考えられよう。1800年代に入る

と共に毛皮商人が入り込みインディアンと交易をはじめ，1830年代にはOregon Trail なるルートが完成された。これは大平原をぬけ，ワイオミング州フォート＝ブリッジャー (Ft. Bridger) から北上し，コロンビア州河岸に達し，河口のアストリア (Astoria) に至るものであった。アズテク＝タノア大語族からの語の中には，動植物に関する語は無く，この語族に属する部族特有のもの paho（ホピ族の祈禱用の杖），kiva（プエブロ族の宗教儀礼用の地下ないし半地下）と，この地域特有の自然現象 pogonip（霧氷）が借り入れられているにすぎない。

次に88語がどの年代に借入れされたのかを調べてみた。ただしこの年代は米国の文献に最初に使用された年を示しているので，はじめて使用された年代とは差が若干あるかもしれない。

1550～1599年	4語	1600～1649年	23語
1650～1699年	3語	1700～1749年	7語
1750～1799年	11語	1800～1849年	22語
1850～1899年	14語	1900～1949年	4語

年代による借入れ語増減理由を探る手がかりとして合衆国建設の歴史を概観する必要があろう。

16世紀後半，英国は製品の市場，必要物資の供給地，スペインに対抗する基地，余剰労働力の場として植民地獲得に乗り出した。失敗に終ったが1583年ギルバート (Sir Humphrey Gilbert) はニューファウンドランド (Newfoundland) へ，1585年から87年にはバージニア地方への植民を企てローリー (Sir Walter Raleigh) がロアノーク島 (Roanoke Island) へ植民地建設を試みた。1607年バージニア州ジェイムズ＝タウン植民，1620年マサチューセッツ州プリマスへ清教徒渡来，1630年マサチューセッツ湾植民地建設，1634年メリーランド (Maryland) 植民地建設，1635年コネティカット (Connecticut) 植民地建設と1640年頃までは「大移住の時期」と呼ばれ，2万5千人程の移住者が新大陸に渡って来た。1650年から1750年にかけては，東海岸に建設された拠点を中心に植民地社会が整備され成熟していっ

た時期である。1750年頃にはアパラチア山脈以東の植民はほぼ完了していた。その後，皮と土地の魅力に取り付かれた英国人はオハイオ川流域への進出をはかった。そこですでにこの地方に勢力をのばしつつあったフランスとの間に衝突が起こり，1754年フレンチ＝アンド＝インディアン戦争となる。この戦争での勝利と共に合衆国における英国領土は拡大の方向へと進んで行った。植民地社会ではその整備成熟と共に，英国人は本国イギリスからの独立を望み，1775年独立戦争がぼっ発し，1782年「講和予備条約」まで続くのである。一方，西部へのルートは徐々にではあるが確立されていき，18世紀中頃には西部開拓にとって大障害になっていたアパラチア山脈を越え，西部へ通ずるルートが発見された。独立戦争により独立を勝ち得たアメリカは，アパラチア山脈以西への移住に本格的に着手しはじめるのであった。しかし白人の侵入を阻止しようとするインディアンの必死の抵抗に会い，しばらくの間は遅々として進まなかった。1794年から1812年にかけての対インディアン戦争の勝利の後，せきを切ったごとく西部への白人流入がはじまり，1830年頃までにミシシッピー川の東側を白人はほぼ埋めつくしてしまった。1848年カリフォルニア州，1858年コロラド州，1874年ダコタ州と金が発見され，白人の西部流入はさらに激しくなるのである。西部地域への農民の定住は，最後のフロンティアである大平原への本格的移住を皮切りに始まった。これも1880年代にはほぼ終了し，1890年にはフロンティア＝ラインの消滅が国勢調査により正式に告げられる。これは前記7つのアメリカ＝インディアン文化圏がことごとく滅び去ったことを意味し，推定約115万いたとされるインディアン人口も約25万人に減少してしまっていた。

以上のように1500年代から1800年代の歴史的事実と各年代の借入れ語数を比較してみると，その関係は明らかである。最初の本格的植民が始まった17世紀前半，本格的な西部開拓が始まり成し遂げられた1800年代，この両時期に調査語全体の7割近い語が借用語として英語に取り入れられたのであった。

借り入れ語の品詞の種類はどうであろうか。

名詞	80語	形容詞	1語	間投詞	1語
名詞と動詞	5語	名詞と形容詞	1語		

「名詞と動詞」の5語は，tomahawk（まさかり，まさかりで打つ），toboggan（トボガン，トボガンに乗って坂をおりる），skunk（しまスカンク，得点させない），potlatch（ポトラッチ，ポトラッチを行う），powwow（病気平癒や狩猟の成功などを祈るために行う儀式，そのような儀式を行う），「名詞と形容詞」の1語は，hickory（ヒッコリー，ヒッコリーで作った），であるが，いずれも名詞から派生しているものである。「形容詞」の1語は，skookum（大きな，強大な）であるが，これも最初は「悪霊」という意味で「名詞」として用いられていたようだ。これらの語も借入れ時は「名詞」であったという考えに立つとすれば，借入れ語88語中87語が「名詞」になる。借入れ語が起りうる要因を考えれば，このように「名詞」が大半を占めるのも容易に理解できる。「間投詞」の1語は how（やあ，さあ）であるが，アメリカ＝インディアン語ではもともと "come on" とか "let us begin" の意味であった。

借入れ語は，その過程において形態，意味のうえに変化が起ることがある。形態変化の代表的なものに woodchuck があげられよう。これはもともと wuchack, otchek, otchig で「イタチ科の動物」を意味した。ところがこの動物は森に住むということから，植民者達は聞きなれない語頭の音を wood に変化させてしまったらしい。matchcoat（インディアンのマント）はチプワ族（Chippewa）の matshigote から来たものであるが，-gote と音に類似性のある coat を入れ換えたものと思われる。chittamwood（ハグマの木）も上記2語の語形成と似ている。chittam はチョクトー族（Choctaw）の shitimmi から来たとされているが，「木」の種類を意味しているということを示す目的で wood を付加したのではなかろうか。以上のように，もともと英語に存在する語をインディアンの語に加えるものもあれば，反対に取り去ってしまうのも見られる。klootch（インディアンの女）は

「女性，婦人」を意味するチヌーク語 klootchman から借入れられたとされている。ところが英語では man が「男性」を意味しまぎらわしいため，man を省いたと考えられる。植民者達が発音しやすいように音変化が起り，それに応じスペリングが変化した借入れ語も多数ある。mugwump<mugquomp, pecan<pakan, coontie<kunti, pocosin<pákwesen, mummichog<moamitteaũg, massasauga<mussisauga 等はその好例であろう。意味変化を起した語としては powwow をまずあげねばならぬだろう。この語はもと「インディアンの医者」，「神に仕える人」，「魔術師」などの意味であった。その後「病気平癒，狩猟の成功などを祈る儀式」の意味を経て「インディアンの催す会議」の意味になり，現代では種々の会に使用されている。mugwump もこの類である。アルゴンキン語族系の語であるが，最初は皮肉的に「大事な人」という意味で用いた。ところが 1884 年には Blaine を共和党の大統領候補者として受け入れることを拒否し，脱党した人々をさすようになった。それ以来政党の中で独立している人をさすために用いられ，さらには確固たる自分の意見を持たない人などに対し用いられている。moose（アメリカヘラジカ）は moos, mos, mus（すっかり食べてしまう）から借入れられたのであるが，動物が若い樹皮を食べてしまうということから，その動物の名前に使用されるようになった。チヌーク語 chamas（あまい）を語源とする camass（ヒナユリ）は，その植物の根が「あまい」ということでその植物名に使用された。pecan はもと「殻のかたい木の実」に用いられたが，現在ではクルミの一種をさすようになっている。その他この範ちゅうに入る借入れ語として，äpan「焼いた物」→pone「トウモロコシパン」，opossum「白い動物」→「フクロネズミ」，pogonip「白みがかった死んだような状態」→「霧氷」等があげられよう。wampum「貝殻玉」→「金《米俗》」，pemmican「インディアンの保存食料」→「現代の非常食品」，parka「インディアンの毛皮製上着」→「フード付スポーツ用ジャケット」，skunk「シマスカンク」→「鼻持ちならぬやつ」，squaw「北米インディアンの女」→「女々しい男」・「女（軽べつ的に）」，sachem「インディアン

の酋長」→「政党の指導者」，wigwam「インディアンのテント小屋」→「急造の大会場」などのように，最初から使用されている意味とさらに新たに加った意味両方を備えている借入れ語もある。

借入れ語の中には直接原語から来たものの他に，他の言語を介して取り入れられたものもある。特にアメリカ＝インディアン語の場合は，アルゴンキン語族の語が，カナダで使用されたフランス語を経てきた場合が多い。この理由は16世紀中頃英国人がやっと植民活動を開始したころ，フランスがすでにセントローレンス川一帯を，そして17世紀には5大湖地方からミシシッピー川にかけ探険し，インディアンとの交易拠点を各地に築いていたということから察することができよう。carcajou（くずり《動》），caribou（カリブー《動》），pekan（フィッシャー＝テン《動》），togue（イワナの一種《魚》），toboggan（そりの一種）などがこの類である。

IV アメリカ英語にみられるアメリカ＝インディアンからの借入れ語について様々な角度から考察してきたが，それを要約することにより，本稿の結論としたい。

英国人のアメリカ東部への植民地建設の時，又アメリカ西部への開拓への時，英国人達は英国本土とはまったく異なる地形，動物，植物，魚類，気象現象，インディアン独得の食品や風俗などにぶつかった。これらに対し，彼らは自分たちの知っている英語要素を組み合せ新造語を考え出したり（例：ground hog「低くたちこめる霧」，sweet potato「さつまいも」，rattlesnake「ガラガラへび」etc.），本国で使用していた語を少しばかりの差異は気にせずあてはめて用いたりしたこともあった（例：robin, blackbird etc.）。しかしそれだけでは新しい事物を正確に表わせず，又誤解を生じることさえあったため，原住民の語の採用は不可欠のものとなるのであった。借入れ語数は17世紀（植民の時期），19世紀（西部開拓の時期）に多く，主として植物，動物，魚類関係の名前が，アルゴンキン語族に属する部族から多く来ているということに対する理由は，このあたりにあろ

う。

借り入れ過程において，発音，スペリング，意味などに変化はあったが88語の借入れ語が現在も使用されていると考えられる。この88語はこれからもアメリカ英語に残っていくであろうか。風俗のようなアメリカ＝インディアン特有のものを表現する語は，そのものが保持される限り生き残ると考えられる。しかし，その消失と共にその言語も失われていくであろう。なかには，意味変化を起し，アメリカ＝インディアンと直接関係のないことを意味することにより生き残る語も多少あるかもしれない。一方，その地域特有の事物（自然現象を含む）を示すアメリカ＝インディアン語は，これからもその地域の事物を表現する手段として使用されていき[5]，アメリカニズムの一特色を形作っていくものと考えられる。

注

1) Albert H. Marckwardt, *American English* (New York: Oxford University Press, 1980) p. 25, 1, 17.

"Our great impetus toward word borrowing arises from the necessity of talking about new things, qualities, operations, concepts, and ideas."

2) 本稿では便宜上，「アメリカ＝インディアン」の意味する範囲を，今の合衆国に住むインディアンと限定したい。

3) Mitford M. Mathews ed., *A Dictionary of Americanism* (Chicago: The University of Chicago Press, 1951)

4) 「ランダム英和大辞典」（小学館），「新英和大辞典」（研究社）に採録されている語を「使用されている可能性がある」と考えた。

5) 調査語88語の中にも，ある特定の地域でしか使用されない語がすでに存在している。例えば，pone, bayou は南部で，kiva は南西部で，cheechako, klootch, potlatch, skookum は北西部で，pogonip, tepee は西部で，musquash は北部で主に使用される。

参考文献

Hicks, John D. *The Federal Union*. Boston: Houghton Mifflin Co., 1964.

Kogan, Hilde H. *American Heritage Pictorial Atlas of United States History*. N. Y.: American Heritage Publishing Co., 1966.

Marckwardt, Albert H. *American English*. New York: Oxford U. Press, 1980.

Mathews, Mitford M. ed. *A Dictionary of Americanism*. Chicago: The University of Chicago Press, 1951.

Pyles Thomas. *Words and Ways of American English*. N.Y.: Random House, 1952.

Turner, Frederic Jackson. *The Frontier in American History*. New York: Robert E. Krieger Publishing Co., 1976.

Encyclopaedia Britanica

青木晴夫「アメリカ＝インディアン」講談社

有賀　貞編「概説アメリカ史」有斐閣

清水　博編「アメリカ史」山川出版社

高木八尺「アメリカ」東京大学出版会

富田虎男「アメリカ＝インディアン」南雲堂

「ランダムハウス英和大辞典」小学館

「新英和大辞典」研究社